迷える主人公？

?紫苑?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迷える主人公？

【Ｎコード】
Ｎ２３６８Ｙ

【作者名】
？紫苑？

【あらすじ】
僕が書く、まよチキの二次創作！
出てくるのは、オリ主、三条　空夜！
その他
「／／／っ！」　えっ？　あの涼月さんが
まさか、デレ月さん！？

えっ？　何？　この状況！（前書き）

駄文ですが・・・

読んでみてください

はじまりはじまり～

えっ？　何？　この状況！

えっ？　何？　この状況！？

俺だってそう思ったわ！
だって俺たちの前には
あのスバル様がいるんだから・・・・・・

まあ　トイレの扉を開けたのは、ジローだから
俺は、関係ないね！
めんどくさいことにならないように・・・・・・
こっそり帰ろ（笑　　がんばって！　ジロー
よしっ！　ばれずに出れたぞ
・・・後ろから聞こえるのは・・・

「――――――見たな？」

男にしてはちょっと高めのアルトボイスの
スバル様の声
続いて・・・

「さ・・・さぁ　何のことだ？　なぁ？　空？
あれっ？　空は？」
「まさか　もう一人いたのか？」
「ま・・・まぁな　一応・・・」
「くそっ！　マズイな・・・」

と言う　ジローとスバル様のやり取り・・・
俺はとっくに逃げたっつうの（笑

よしっ　さっさとこの場を離れよう

ダッダッダ
やべっ　ジロー達がこっちに向かって走ってきたぜ！
隅っこに避難避難と

おっ？　ジローが理科室に入って行ったぞ？
それに続いてスバル様がドアを蹴破って入って行った・・・
こえ～

「――――――やるぞ。　ボクの『執事ナックル』でな」

執事ナックル？　すげぇセンスしてるなぁ～

「――――――『エンド・オブ・アース』」
「スケールでけぇえええっ！」

あれっ？　地球なくなっちゃった？
・・・何か今さっきから何を言ってるか
気になるな。　ちょっと見てみようかな？

あっ！　ビーカーが落ちそう！？
危ない！　　ヒューン！　　バン！
　　ポスッ！

ふぅ　助かった。　今のは・・・
　俺が消しゴムを玉にパチンコでビーカーを撃ち、
落ちるところをずらして、ソファーにポスッとね。

パチンコていうか飛ばすもの得意なんだ
エアガンとか？

あららっ　ビーカーが落ちると思ったジローがスバル様を
助けようと・・・
スバル様を押し倒し・・・
ジローの手がつかんだ先には―――
スバル様のふんわりふくらんだ胸がー
あれっ？　ふくらんでる？
スバル様って女？
よく見ると女っぽい顔してるしな

めんどくさいことにならないうちに退散！

「きゃあああああああああっ！」

女の子みたいな声が後ろから聞こえる・・・
やっぱり女だよな～

その後に・・・

「ごはぁっ！」

ジローの声・・・　ジロー・・・どんまい（笑

えっ？　何？　この状況！（後書き）

アンケートを受けてくれた方々
ありがとうございます。

感想などよろしくお願いします

あれっ？　ジローって・・・（前書き）

早くもお気に入り登録が１０件も！
ありがとうございます！

では、本編へＧＯ！

あれっ？　ジローって・・・

あれっ？　ジローって女性恐怖症だよな
ヤバくね？
ちなみに俺はジローとはちょっと違うけど・・・
一定時間女性に触れられると
厄介なことになるんだよなぁ～
・・・はぁ・・・

「殺す」

後ろから物騒な声が聞こえてくる・・・

「・・・って、消火器ぃいいいいっ！？」

消火器で殺ろうとしてるのか・・・スバル様・・・

・・・・・省略・・・・・・

ジローが保健室に運ばれたから
俺もいこっかな～？

コンコン

「失礼しま～す。　ジローいる？」

「おっ？　空っ！　助けてくれっ！」
あっ　ジローだ～　えぇ～と　手錠をはめていて・・・
女の子が一緒のベットにいると・・・
「ジロー・・・　まさかお前　Mに目覚めたか・・・」
「ちげーよ！」
「ふぅ～ん」
「興味なくすな！」
「だって、違うならつまんないじゃん」
「どこが！」

「おっと　そこにいるのは・・・涼月さん？」
「そうよ？　わたしは、涼月　奏よ？
あなたは？」
「おぉーっと　申し遅れましたね
俺は　三条　空夜
ジローの飼い主です」
「俺はペットか！？」
「えっ？　知らなかったの？」

「く、あはは・・・・・」

おっ　涼月さんが笑っているぞ？

「あなたたちっておもしろいわね」
「そうか？」
「うん」

「で？　今は何をしてたの？
ジローと涼月さんは？」
「そうだった！　おい空！　この
手錠外してくれ！」
「いいの？　涼月さん　はずして？」
「ん～　却下♪」
「なんでだよ！」
「うふふ・・・　ひ・み・つ」
「そういえば、スバル様は？
ジローといっしょにいたと思ったんだけど・・・」
「あっ　そういえば　空　お前、
俺を見捨てて逃げたな！？」
「ん～　なんのことかな？」
「しらばっくれんな！」

あはっ　やっぱりジローはいじりがいがあるね～

「スバルは・・・この部屋にいるわよ？」
「・・・へ？」
「そういわれてみれば　気配があるな」
「気配！？　そんなのわかんの？」
「えっ　うん　普通に」

話している俺らを尻目に
涼月さんはもう一つのベットに歩いて行って、
そこを仕切っていた　カーテンを開けた

「な――――」

瞬間、ジローは言葉を失っていた。

あれっ？　ジローって・・・（後書き）

大丈夫ですかね？
誤字とかありませんかね～

感想、誤字等がありましたら
教えていただけると助かります

拘束されたスバル様（前書き）

２話しか書いてないのにお気に入り登録が１７件も！
うれしいです

タイトル変更しました

拘束されたスバル様

そこには、スバル様が・・・
口には黒い口枷が無理やり詰め込まれていた。
しかも、それだけじゃない。
全身を覆う銀色の鎖と
いくつもの南京錠、
たぶん後ろ手に手錠もされているんじゃないか？
ジローは

「外してあげろよ！？」
「外したほうがいいの？　本当に？」
「ジロー・・・やっぱりお前Ｍに・・・」
「目覚めてねーよ！」

「分かったわ。　後悔しないでね」
「するか！」

「げほっ！　ごほっ！」

がちゃがちゃとリングギャグが外され、
スバル様が咳き込んだ。

「ひっひどいです、お嬢様！　どうして、どうして
こんなことをするんですか！」

あとは、身体を縛っている鎖をはずせば

スバル様は自由に――――――。

「早く・・・早く　この鎖を外してください！
じゃないとそこの変態を殺せません！」

どんまい　ジロー（笑
　気を付けて　逝っておいで

「空！　助けて！」

ジローから助けを求められる・・・
　俺はそっと目をそらす・・・

「見捨てるなぁー！　空の秘密を
こいつらに教えるぞ！」
「やめろ！　お前がそういうなら
こっちもバラすぞ？
ねぇ　サカマ・チキ――――――」
「言うな！　ゴメンナサイ
俺が間違っていましたぁー」
「ねぇ三条君の秘密って？」
「えっ？　そっそれは・・・」
「ジ・ロ・ウ？」
「なっ何でもないよ！　うん・・・なんでも・・・」
「そう？」
「そっそうそう！」
「ふぅ～ん」

「あっ　ねっねぇ　スバル様ってこれからどうなるの？」
「えっ　あぁ　大丈夫よ　ジローくんと三条くんさえ

ばらさなければねぇ～」
「そう。　よかった（ニコッ）」
「／／／っ！　そっそういえば
三条君、ジロー君。
あなたたちって何か特殊な
体質なの？」

ジローがぎくって思ったのが
分かった（笑）

「スバルから聞いたの。
あなたが鼻血出したとき身体がどうとか言ってたって」
「三条君も秘密がどうとか言ってたでしょ？」

この女・・・鋭い！

「う～ん　三条君、ソラ君って呼んでいいかしら？」
「いいよ？」
「ありがとう。　私は奏でいいわ。
それよりソラ君の体質から調べましょうか（ニヤリ）」

マズいぞ　あれがばれると――――

「えっ？　ジローからが・・・」
「いいから！」

拘束されたスバル様（後書き）

次回、空夜の体質がわかる？

お楽しみに～

えっ？　そっソラくん！？（前書き）

さて、なんでしょうか！

えっ？　そっソラくん！？

「えっなっなんで服脱がすの？」
「静かに」
「だっだめ！　それ以上触ったら――――」
やばいっ　くるぞっ！

うァっ

「うぅ」
「だっ大丈夫？　やりすぎた？」
「大丈夫だよ奏」
「そっそう？」
「うん。　今日もかわいいね　奏」
「えっ／／／／　（ちょっちょっと　おっおかしくなってない？）」
「おきちゃったか。涼月？　ソラの体質は
異性が一定時間触れていると
紳士っていうかホストっぽくなるんだよ」
「そうなの？」
「そうだよ。　奏　もっと近くにおいでよ」
「えっ　うっうん　分かったわ」
「いい子だ　そんな奏には――――」
「えっ／／／／」

キャラが変わったソラは、奏を持ち上げ
おでこにキスをした。

「うん。かわいいね」
「あっありがとう／／／（初めて男の人にキスされた／／／）」
「おっお嬢様！？」
スバル様が驚いているな
「どうした？　スバル
笑顔でいなきゃかわいい顔が台無しだよ？」
「そっそうか／／／」
すごいね。　ソラはこれで
今まで何人の女性をおとしてきたんだろうか
「――――――っは！」
やべぇ～　記憶がねぇ
俺、何をした？　奏は顔真っ赤にして
俺の足元に座り込んでるし、
スバルはジローと一緒にじ～っと
こっちを見てるし、
「なっなぁ　俺何した？
記憶がないんだけど・・・」
「ソラ・・・お前は
涼月のおでこにキスしたぞ？」
「は？　まっマジで！？」
「おぅ」
「うわぁ　奏　ごめんな？」

「／／／いっいえ　私のほうこそ
無理やりやっちゃったから・・・」
「そっそう？　じゃあ　お互い様ってことでいい？」
「うっうん　いいわ」

えっ？　そっソラくん！？（後書き）

短いかな？

空の体質は何と・・・異性に触れられると執事・ホストっぽくなるでした！

・・・どんな体質だよ！って気もしますが・・・

ジローはね？（前書き）

短いですが更新します

ジローはね？

「あっジローはね、女性恐怖症なの」
「あっ　ソラ　お前――――」
「いいじゃん　俺もばれちゃったし？」
「女性恐怖症？」
「そっ　女の子に触れられたりするだけで
鼻血が出たり、失神したりするの」
「あの人のせいでな・・・」
「あの人？」
「そうだ。　坂町朱美って知ってるか？」
「知ってるわよ？　女子プロレスラーでしょ？」
「あぁ　実はあの人、俺の母親なんだ」
「・・・それは初耳ね」

ジローは奏に女性恐怖症になった
理由を話した。

あぁ～　ジローみてると
チキンが食べたくなる～。
サカマ・チキン・ジロー・・・チキンくん
チキンくれ～

「ところで、ソラ君、ジロー君」

急に奏の雰囲気が変わった

「あなたたち自分の恐怖症を治したいとは思わないの？」

――――――省略――――――

チャラーン

ソラとジローはカナデとスバルと共犯関係になった

チャラーン

ジローは失神した

ソラはジローに「頑張って生きろよ」と言った

ジローはね？（後書き）

チャラーン
作者はなぜか力尽きたw
みじかいですねw

ソラ、アサダヨー？（前書き）

お気に入り登録がはやくも３０件以上！
登録してくださったみなさん
ありがとうございます
うれしいです！

ソラ、アサダヨー？

「ソラ、アサダヨー　オキテー」

ふわぁ　もう朝か

ただいまの時間、　５：００

ちょっと早く起きちゃったなぁ

「サンキューな　レイ　起こしてくれて」

「ドウイタシマシテー」

レイとは俺が飼っているインコちゃんだよ？

あー腹減ったなぁ～

今日は・・・どうしよっかなぁ～

ご飯に味噌汁、焼き魚にサラダでいっか。

～調理中～

「できた～」

「レイノハ～？」

「あぁ！　忘れてたよ　ごめんな？」

「イーヨ　ベツニー　ゴハンクレルナラー」

「そ～か。　ほら飯だぞ」

「ワーイ」

そうこうしてる間に時間は過ぎて・・・・・・・

ピーンポーン

チャイムが鳴った・・・
誰？

「は～い。」
「おはようソラくん」
「・・・何で奏が？」
「ソラくんを迎えに来たのよ」
「は？　てか、何で家の場所が？」
「それは普通に涼月家の――――――」
「あ～　はいはい　分かった気がするわ」
「そう？」
「あぁ　ちょっと待ってろよ？
すぐ、準備するから」
「分かったわ」

～準備中～

「待ったか？」
「いいえ？」
「そうか　よかった」

女の子は待たせちゃ
ダメだもんな～

「じゃあ　行くか」
「ええ。」

「レイ　行ってくるな～」
「イッテラッシャーイ」

ソラ、アサダヨー？（後書き）

マタマタ　ミジカイデスネ・・・
キリガイイトコロデオワラセルト
ミジカクナルンデスヨネー

・・・／／／（前書き）

更新します＾＾

・・・／／／

「よう。　ジロー、どうした？
朝から不景気そうな面してんな」

ジローが教室に入って席に着くなり、
クラスメイトの黒瀬が話しかけてきた。
俺？　俺は少し離れた席で
教室を見回しているよ？

なぜか女の子と目が合うと、
顔を真っ赤にして目をそらされるんだけど・・・
俺、そこまで嫌われてんの？
泣いていい？

「お～い。ソラ？」
「・・・？　何？ジロー」
「お前ってファンクラブあんの？」
「は？　何それ？　知らないよ？」
「そうか？　いやな？　黒瀬がソラにもファンクラブ
があるって言ってたからさ」
「えっ？　マジで？
俺、嫌われてないの？」
「は？何で？」
「だって女子と目が合うとそらされるんだもん」
「お前それって――――――――」
「・・・？」

「・・・っ！　（女子からの視線が痛い！）
いっいや？　なっ何でもない！」
「そうか？」
「あぁ　（助かった～）」

――――――――――　しょうりゃっく　――――――――――

昼休み

「ソラくん♪　一緒にご飯食べない？」
「えっ？　あぁ　いいよ？」
「ありがと」
「それにしても奏、　スバル様と一緒に
食べないのか？」
「えぇ　いつもは食べてるんだけど
今日は、スバルはジローくんと♪
あと、スバルでいいわよ？
名前、そのほうがスバルも喜ぶだろうしね？」
「分かったよ」

ざわざわ

《ぎゃー　ソラくんが涼月さんのことを

名前で呼んだわぁ〜！！
しかも一緒に昼ご飯までぇ！！》

何か女の子が落ち込んでるぞ？
何でだろう？

「「ごちそうさまでした！」」

「ねぇ　ソラくん　屋上に行かない？
ジローくんとスバルがいるから」
「？いいぞ？」

・・・／／／（後書き）

短いかも？

感想、誤字等などがあったら
教えてください　＞（＿＿）＜

へぇ～めずらしい（前書き）

更新！

へぇ～めずらしい

ガチャリ

「へぇ　珍しいわね」

奏がジローに言う
ジローの肩にはスバルの頭が乗っかっている

「ふふっ眠っちゃってる。　珍しいわね
スバルが他人のそばで眠るなんて」
「うらやましいぞコノヤロー」
「そんなに珍しいのか？　てかソラ　どこがだ！」

「ハーレーに乗って首都高を逆走する
イリオモテヤマネコを見た気分ね」

どんな気分だ？

「だって女子の頭が自分の肩に
のってるなんて、うらやましいだろ？」
「そうか？」
「あぁ」

昨日までのスバルがうそのようだ・・・

「そういえば、ソラくん、ジローくん、これをあげるわ」
いきなり、奏は俺たちの前に紙を出してきた
「なにこれ？」
「ジローくんに渡したのは『執事券』
それがあればあなたはスバルに一回だけ
命令できるの」
素晴らしい券だ・・・
「・・・で　俺に渡したのは？」
「／／／そっそれは　私に命令できる券なの／／／
通称『主券』というのよ？」
「そっそうか」
何でそんな大事な券を俺に？
「えっえぇ」
なんだかんだで時間は過ぎていき・・・
俺が気にしていた、教室に戻ったら、
肩を落としている女子が何人かいたぐらいで
静かだった・・・
しかし、この噂によって、ジローは『Ｓ４』に狙われることになった

Ｓ４とは・・・『シューティングスタースバル様』
の略であり『ＳＤＦ』と学園の女子を分けている
スバル様の地下ファンクラブである

ちなみに、
ＳＤＦとは・・・『ソラ様大好きファンクラブ』
の略である
しかし、当の本人は全く気付いていないとの
噂もある

それと、ついに奏による俺たちの
女性恐怖症治療プログラムが実行された

へぇ～めずらしい（後書き）

すいませんが
アンケートを取りたいと思います

ヒロインについて

?ヒロインは奏だけがいい！
?ハーレムにしたい！（誰を入れるかも・・・）
?オリキャラをヒロインに追加したい！（いいアイデアがありましたら、
教えてください）

この中でこれがいい！と思うのを教えてください！

なかったら・・・
どうなるか分かりません（^＿＿^，）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2368y/

迷える主人公？

2011年11月17日21時33分発行